論文要旨

学位論文題目：台日接触場面における合意形成会話に関する研究−台湾人上級日本語学習者と日本語母語話者を中心に−

氏名：呉　映璇

私たちは何かを決める際に、それについて話し合ったり、他人の意見に同意したり、反対したりして、結論をだすことができる。本研究では、話題提起から意見を表明し、相手と話し合い、結論に至るまでの会話に着目し、研究を行った。「会話者が互いに意見を述べ合って双方の考えを深めた上で、話題を収束していく、すなわち会話者同士の結論の一致を目指す会話」を「合意形成会話」と定義する。発話カテゴリーに着目して、JFL 環境の台湾人日本語学習者と日本語母語話者との台日接触場面における合意形成会話の出現傾向、特徴及び、台湾人日本語学習者と日本語母語話者の合意形成会話の相違点を明らかにすることを目的とした。

まず、第 1 章では研究の背景として、まず本研究で用いる専門用語について定義した。また、合意形成会話は日常生活において重要であり、親密な関係にある台日間の合意形成会話がどのように具現されるか、その実態を解明することの重要性について述べ、続いて、JFL 環境の学習者の問題点を挙げ、その解決に本研究が貢献する可能性について述べた。

第 2 章では、先行研究として、合意形成場面に関する先行研究を概観した上で、本研究の立場を明らかにし、先行研究に残された課題及び本研究の研究課題を示した。

第 3 章では、調査方法と分析方法についてそれぞれ説明する。調査方法については調査協力者の概要を提示し、調査手順、調査資料のロールカード及び文字化方法について述べた。

第 4 章では、研究 1 を報告する。研究 1 は合意形成会話の全体的構造に着目し、分析していく。学習者と母語話者それぞれの接触場面における合意形成場面での発話カテゴリーの使用傾向、また学習者と母語話者の使用を比較した結果を示し、考察した。研究の結果、台日接触場面における合意形成会話による全体的な考察としては、学習者と母語話者それぞれ担当する役割があり、誰か片方でリードするのではなく、協力しあって会話を完成させることが示唆された。より能動的に参加する項目があれば、受動的で控えめに参加する項目もある。つまり、役割の分担は異なるものの、学習者にも母語話者にも消極的な態度は見られず、両方とも積極的に会話に参加していると考えられる。

第 5 章では、研究 2 を報告する。研究 2 は、研究 1 の結果を踏まえて、合意形成会話の特定構造についてさらに検討していく。これまでの先行研究の成果からは、合意形成という目的を達成するには、相手に反対意見を表明するのみならず、同意を述べることにより、合意が形成できるようになったことが示されている。研究 2 では接触場面における合意形成会話による同意表現の実態を考察した。その結果、同意の際に、学習者と母語話者はいずれも相づちのみの表現で同意を表明することを好んでいることが示唆された。また、出現回数が少なかった同意表現も両者に同じ傾向が示された。「実質的な発話」により同意を表明する例は本研究のデータではほとんど観察されなかった。学習者は前発話の話者である母語話者の発話に依存して発話することと、母語話者は会話の相手である学習者に理解しやすくするため、いくつかの同意表現を重なって使用する可能性が示唆された。さらに、先行発話のタイプに関係な

く、さまざまな表現で同意を示すことが示唆された。

第 6 章では、研究 3 を報告する。研究 3 は、合意形成会話の特定構造の解明を目的とし、研究 1 の結果を踏まえて、さらに詳しく分析していく。先行研究の知見からは、合意形成会話ではまとめ発話が合意に達するか否かの重要な役割を果たしていることがわかった。研究 3 では接触場面における合意形成会話によるまとめ発話の実態を分析した結果、学習者は「談話全体の途中」で今まで話してきた内容を一度まとめてから話し合いを続ける特徴があるのに対して、母語話者においては「談話全体の途中」と「談話全体の終結」の出現回数がほぼ等しいため、母語話者は談話の途中で内容をまとめながらも、話し合いの完結の際に再びまとめる特徴が明らかになった。また、まとめ発話の形式において学習者も母語話者も一方的に決定するような形でまとめていく傾向があるが、母語話者は結論をいう際、決定型の他に、質問型で相手の意見を伺いながら、結論をまとめていく傾向が学習者よりも顕著である。学習者は談話の途中に一方的に決めたような言い方で、より決断的に結論づける傾向があるのに対して、母語話者は相手の意思を確認し、相手に配慮しながら、まとめていく様子が示唆された。また、全体的に母語話者のまとめ発話が多いことからも、母語話者は談話全体のまとめ役を担っていることが明らかになった。

第 7 章では、論文全体の総括として、上記の三つの研究結果をまとめ、総合的な考察をしてから、本研究の意義を述べ、今後の課題についてまとめた。本研究の意義についてまず、異文化コミュニケーション教育への提言ができることである。また、コミュニケーション能力の育成が期待される。最後に日本語教育への貢献について、多様な用法を教科書と授業に導入して、学習者に幅広い選択肢を与えて、意見の深まる活発な合意形成会話が期待される。今後の課題として、会話テーマを検討し、分析する必要がある。また、データを拡充してさらなる分析が考えられる。それから、異なるレベルの学習者との比較も必要である。最後に、量的な分析だけに限らず、内容面の質的な分析も考えている。今後は様々な角度からの研究を重ね、台湾人日本語学習者と日本語母語話者による合意形成会話の全貌を見ていくべきである。